



2021 J.LEAGUE™



公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
www.jleague.jp/

スポーツで、もっと、幸せな国へ。Jリーグ百年構想



新しいスポーツ文化を育む年に

2021シーズンのJリーグは、新たにテゲバジャーロ宮崎を迎え、40都道府県にある57クラブとともにスタートいたします。

昨シーズンは、新型コロナウイルスの発生により長いシーズンの中断と再開を経験しました。コロナウイルスが人を媒介に増殖して人にうつすものであることから、感染対策として人と人の距離を離すことが求められた1年でした。全国のスタジアムに人々が集い交流することで活気や熱狂が生まれるJリーグもまた、多くの制限のもとでの開催となりましたが、共通のガイドラインのもとファン・サポーターの皆さまとともに1,103試合の経験を積み重ねてまいりました。

私たちは、社会的な距離をとり続けることで生じがちなあらゆる分断こそが、本当に立ち向かうべき相手であることに気がつきました。そこで、分断を回避すべく、できる限りオープンに、メディアの皆さまのお力をお借りしながら、コミュニケーションを絶やさずに、結束して立ち向かうことをよりどころとしてリーグを運営してまいりました。

経験を積み重ねながら、クラブとリーグ、選手とチーム、ファン・サポーター同士、グラスルーツとトップチーム、地域とクラブなどが、それぞれのつながりを絶やすことなく、時には競技や業種を超えて連携を深め、お互いを守り合いながら、プレーをし、観戦し、運営するという新しいスポーツ文化が、少しずつ築かれつつあると感じています。

2021シーズンも引き続き、結束してコロナ対策を講じながら挑戦し、互いに守り合う文化を育んでいくことが、スポーツを続けていく上で不可欠であると考えています。安心・安全にJリーグを楽しんでいただける運営を継続し、スタジアムの外でも様々な形でJリーグを楽しんでいただける環境を整備してまいります。

今年はJ1リーグが20クラブとなり、各リーグ間の昇降格制度が復活します。いっそう激しさを増すことが予想されますが、選手たちはサッカーができることへの喜びと感謝を欠かさず懸命にプレーで応えてくれると信じています。Jリーグが追求するのは、タフで、フェアで、エキサイティングなプレーで沸かせるフットボールです。シーズンのどのシーンを切り取っても、最高のパフォーマンスで困難に立ち向かう姿を示し続けることで、コロナ禍の共通の困難に立ち向かう社会の活力の一部となることが、最大の恩返しとなると信じています。2021シーズンはどんな素晴らしいプレーが見られるのか、どんなドラマが待っているのか、ぜひ期待してください。

最後になりますが、Jリーグの理念にご賛同いただき、リーグやクラブを支える企業さまや自治体の皆さまに対し新たなシーズンを迎えられることを心より御礼申し上げます。

スポーツを通じて思いきり喜怒哀楽を表出し、様々な交流や祝祭が回復し、クラブをきっかけに人々がつながりあって、地域の笑顔が増えて絆がより強くなっていく、そうした中で育まれるスポーツ文化を絶やさないよう、安全に、新しいシーズンを運営してまいります。

2021シーズンのJリーグを、よろしくお願いいたします。

公益社団法人日本プロサッカーリーグ

チェアマン 村井 満

2021 J.LEAGUE™ PROFILE | 1



Jリーグ理念

- 1、日本サッカーの水準向上及びサッカーの普及促進
- 1、豊かなスポーツ文化の振興及び国民の心身の健全な発達への寄与
- 1、国際社会における交流及び親善への貢献



2021 J.LEAGUE™

■公式試合

2021シーズンは、2020シーズンの新型コロナウイルス感染拡大による大会日程、次シーズンへの昇格・降格ルールの変更に伴い、明治安田生命 J 1 リーグは20チーム、J 2 は22チーム、J 3 は新入会クラブのテゲバジャーロ宮崎を加えた15チームで行います。

これに伴い、2022シーズンに向けた J 1・J 2、J 2・J 3 の入れ替え方法も変更となり、J 1 から J 2 への降格、J 2 から J 3 への降格は4クラブとなり、昇格はそれぞれ2クラブとなります。なお、J 1 参入プレーオフの開催はありません。

2021シーズンは、明治安田生命 J リーグ、J リーグYBCルヴァンカップ合わせて1,115試合を予定しています。

コロナ禍でありながら、安心・安全なスタジアム環境でスポーツを観る、楽しむ環境を提供し続けます。

●明治安田生命 J 1 リーグ

20チームのホーム&アウェイ方式による2回戦総当たりリーグ戦(全38節/合計380試合)。

●J リーグYBCルヴァンカップ

J 1・20チームによるリーグカップ戦。

グループステージは、AFCチャンピオンズリーグ(ACL)出場4チームを除く16チームを4グループに分け、各グループで2回戦総当たり(ホーム&アウェイ)のリーグ戦を行う。

各グループ上位2チームはプレーオフステージに進出。

同ステージ勝利チームとACL出場チームはホーム&アウェイ方式のプライムステージ(準々決勝～決勝)を実施する。ただし、決勝は1試合のみ。

なお、21歳以下の選手を1名以上先発に含めるルールは適用しない。

●FUJI XEROX SUPER CUP

前年度の J リーグチャンピオンチームvs天皇杯JFA全日本サッカー選手権大会優勝チームによる対戦(1試合)。

●明治安田生命 J 2 リーグ

22チームのホーム&アウェイ方式による2回戦総当たりリーグ戦(全42節/合計462試合)。

【J 1・J 2 の入れ替えについて】

- 明治安田生命 J 1 リーグにおける年間順位の下位4クラブが J 2 に自動降格
- 明治安田生命 J 2 リーグにおける年間順位 1 位、2 位のクラブが J 1 に自動昇格
- J 2 における年間順位の上位 2 クラブのうち J 1 クラブライセンスの交付判定を受けられなかった J 2 クラブがあった場合は、次のとおりとする
 - ・当該 J 2 クラブは J 1 に昇格できない。この場合において J 2 における年間順位 3 位以下の J 2 クラブが J 1 に昇格することはない
 - ・上記に該当する J 2 クラブが 1 クラブの場合、J 1 の年間順位 17 位のクラブは降格しない
 - ・上記に該当する J 2 クラブが 2 クラブの場合、J 1 の年間順位 17 位および 18 位の J 1 クラブは降格しない

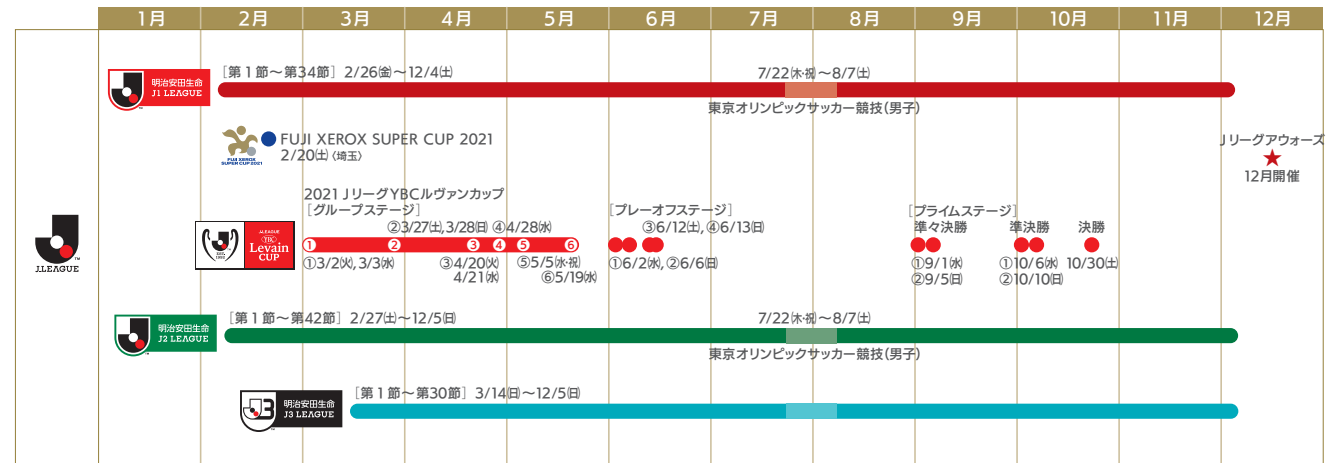
●明治安田生命 J 3 リーグ

15チームのホーム&アウェイ方式による2回戦総当たりリーグ戦(全30節/合計210試合)。※2021シーズンよりU-23チームの参加はなし

【J 2・J 3 の入れ替えについて】

- 明治安田生命 J 2 リーグにおける年間順位の下位4クラブが自動降格
- 明治安田生命 J 3 リーグにおける年間順位 1 位、2 位が J 2 に自動昇格
- J 3 における年間順位の上位 2 クラブのうち J リーグクラブライセンスの交付判定を受けていない J 3 クラブがあった場合は、次のとおりとする

■2021 J リーグ 年間スケジュール



※日程は変更になる場合があります。

- ・当該 J 3 クラブは J 2 に昇格できない。この場合において J 3 における年間順位 3 位以下のクラブが J 2 に昇格することはない
- ・上記に該当する J 3 クラブが 1 クラブの場合、J 2 の年間順位 19 位のクラブは降格しない
- ・上記に該当する J 3 クラブが 2 クラブの場合、J 2 の年間順位 19 位および 20 位のクラブは降格しない

【J リーグが主催するその他の大会】

J リーグエリートリーグ、J ユースカップ、J リーグ U-14、オフシーズンなどに実施する非公公式試合

【J クラブが参加するその他の大会】

天皇杯JFA全日本サッカー選手権大会
AFCチャンピオンズリーグ

●競技ルール、試合開催における変更事項

2020シーズンは、新型コロナウイルス感染症対策のため、日程変更や試合開催リスクへの対応のためのルール設定、登録ウインドーなどの既存の各種ルールの変更、感染予防のためのエントリー前検査の導入や選手交代人数を3名から5名に増やすなど、競技ルールを変更して開催いたしました。

2021シーズンは、2020シーズンに導入したルールを一部継続しながら公式試合を運営していきます。

今シーズンはさまざまなリスクによって試合開催ができなくなった場合に開催したとみなすルールを新たに設定しました。試合延期となった場合は開催に向けて最大限の努力をした後、それでも開催できなかった場合はこのルールを適用します。

昨シーズンは各リーグから下位リーグへの降格をなくしたことにより、今シーズンは降格クラブが例年より多い4クラブとなります。例年より厳しい条件下で行われるリーグ戦において、より公正に試合を行うために、J 1 では昨シーズン途中で導入を中止したビデオアシスタントレフェリー (VAR) を改めて導入します。

なお、各大会の賞金は2019シーズンの水準に戻し、明治安田生命 J 1 優勝賞金は3億円、J リーグYBCルヴァンカップは1.5億円となります。

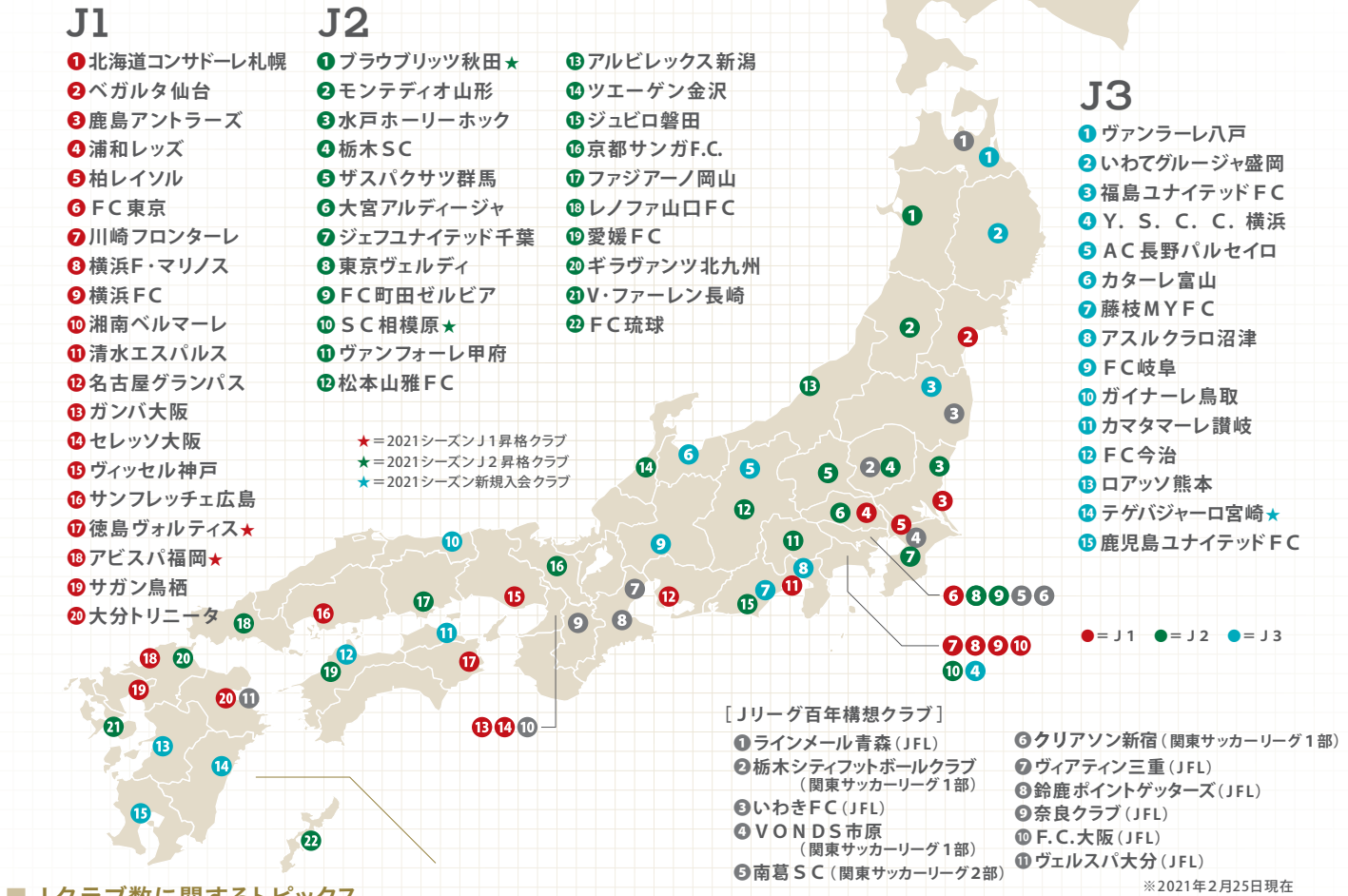
●2021シーズンの大会方式、競技ルール等の変更事項

	2019	2020	2021
クラブ数	J 1	18	18
	J 2	22	22
	J 3	18※1	15※2
昇降格	J 2 から J 1 へ昇格	2+PO	2
	J 3 から J 2 へ昇格	2	2
	J 1 から J 2 へ降格	2+PO	降格なし、POなし
	J 2 から J 3 へ降格	2	降格なし
試合中止(延期) 対応 (延期した試合の代替日設定が不可能な場合)		未開催として扱う	未開催として扱う
大会成立要件 (試合数)		基準なし	「基準試合数」以上の開催： 全試合数の75%、かつ、全クラブが50% (ホーム、アウェイ問わず)を開催
登録ウインドー		2回	3回※4
エントリー前検査		なし	あり
VAR (J 1)		なし	休止※5
交代枠		3名	5名※3
飲水タイム (WBGT値は※6参照)		WBGT値規定以上で実施	WBGT値にかかわらず実施
ルヴァンカップU-21先発出場		適用	不適用
賞金		2019シーズン比50%	2019シーズン水準に戻す

※ 1：開幕当初参加を予定していたFC東京U-23は、2020シーズンは J 3 不参加 ※ 2：2021シーズンよりU-23チームの参加はなし
※ 3：6月以降(シーズン再開より) ※ 4：第1回がシーズン中断期間のため第3回を追加 ※ 5：第1節のみ導入
※ 6：WBGT値とは気温、湿度、日射・輻射などの周辺熱環境を総合して計測する暑さ指数。JFA「熱中症対策ガイドライン」にて飲水タイムを行う際の基準が定められている。

Jクラブについて

■2021 Jリーグ クラブ編成



2021 Jリーグトピックス

■2021シーズンで達成されそうな記録

2018シーズンにガンバ大阪 遠藤保仁選手がフィールドプレーヤーで初めて通算試合600出場を達成したのに続き、浦和レッズ 阿部勇樹選手があと23試合で史上3人目の通算600試合出場を達成します。

また、西川周作選手(浦和)は、あと10試合で通算500試合出場、興梠慎三選手(浦和)は、あと11試合で史上12人目の通算450試合出場達成となります。通算得点ランキングでは、大久保嘉人選手のセレッソ大阪移籍に伴うJ1復帰によって、さらなる記録更新が期待されます。また、興梠選手はあと5得点で通算得点記録第2位(佐藤寿人氏／161得点)を更新、あと29得点で現在1位の大久保選手の持つ最多記録185得点を更新します。(選手の所属は2021年2月19日現在)

●通算出場ランキング(350試合以上／現J1所属選手)

選手名	所属	試合数	記録達成の可能性
阿部 勇樹	浦和	577	通算600試合まであと23試合
西川 周作	浦和	490	通算500試合まであと10試合
興梠 慎三	浦和	439	通算450試合まであと11試合
中村 俊輔	横浜FC	396	通算400試合まであと 4試合
柏木 陽介	浦和	392	通算400試合まであと 8試合
青山 敏弘	広島	389	通算400試合まであと11試合
森重 真人	FC東京	375	通算400試合まであと25試合
大谷 秀和	柏	374	通算400試合まであと26試合
楨野 智章	浦和	368	通算400試合まであと32試合
渡邊 千真	横浜FC	351	(通算400試合まであと49試合)

●通算得点上位ランキング

選手名	最終所属	得点	シュート数	試合数	出場時間(分)	1試合平均
大久保 嘉人	C大阪	185	1,108	448	34,826	0.413
佐藤 寿人	千葉	161	717	404	29,899	0.399
興梠 慎三	浦和	157	637	439	31,476	0.358
中山 雅史	沼津	157	743	355	26,451	0.442
前田 遼一	岐阜	154	700	429	32,082	0.359
マルキーニョス	神戸	152	1066	333	27,608	0.456
三浦 知良	横浜FC	139	814	325	26,384	0.428
ウェズレイ	大分	124	868	217	19,052	0.571
小林 悠	川崎F	120	618	286	19,832	0.42
ジュニーニョ	広島	116	843	264	20,901	0.439
エジミウソン	C大阪	111	705	236	19,473	0.47
柳沢 敦	仙台	108	572	371	24,437	0.291
遠藤 保仁	磐田	103	818	641	55,043	0.161
藤田 俊哉	千葉	100	637	419	34,731	0.239
渡邊 千真	横浜FC	100	613	351	22,311	0.285
玉田 圭司	長崎	99	622	366	27,456	0.27
豊田 陽平	鳥栖	98	467	298	19,971	0.329

●通算成績(勝利数上位ランキング／現J1クラブ)

チーム	勝利数	分	敗戦数	得点	失点
広島	527	136	289	1,640	1,133
横浜FM	464	165	323	1,491	1,163
浦和	429	150	343	1,433	1,242
G大阪	424	137	357	1,574	1,366
名古屋	418	140	360	1,401	1,305
清水	404	143	371	1,334	1,351
広島	384	142	362	1,294	1,196
柏	338	131	301	1,181	1,117
川崎F	292	120	162	1,047	743
C大阪	280	112	280	1,024	1,029
FC東京	278	142	240	912	838
神戸	234	146	342	959	1,173
湘南	149	56	255	596	828
仙台	139	109	186	530	624
鳥栖	108	81	117	355	400
大分	99	80	153	356	457
札幌	85	47	166	379	548
福岡	71	28	189	313	567
横浜FC	13	10	45	57	126
徳島	3	5	26	16	74
					10勝まで 7勝

●J1監督勝利数ランキング

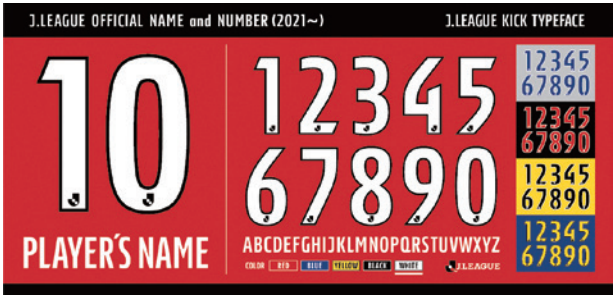
順位	監督名	最終所属	勝利数	試合数	試合数ランク	J1年間優勝
1	西野 朗	名古屋	270	524	1	2005(G大阪)
2	長谷川 健太	FC東京	204	442	3	2011(柏)
3	ペトロヴィッチ	札幌	203	450	2	
4	ネルシーニョ	柏	188	405	4	
5	トニーニョ セレーゾ	広島	141	272	6	2000,2001(広島)
6	城福 浩	広島	105	283	5	2007,2008,2009(広島)
6	オズワルド オリヴェイラ	浦和	105	208	13	
8	風間 八宏	名古屋	104	223	9	
9	ストイコビッチ	名古屋	103	204	16	2010(名古屋)
10	ハンス オフト	磐田	100	209	11	

■Jリーグオフィシャルネーム&ナンバーを導入

Jリーグは、2021シーズンよりJリーグ公式試合に出場する選手が着用するユニフォームに表示する「選手番号および選手名」の書体デザインを全クラブで統一し、「Jリーグオフィシャルネーム&ナンバー」として導入することを決定しました。採用する書体は、北欧で最大級のブランディングエージェンシーであるKontrapunkt(コントラプンクト)社による、視認性に配慮したユニバーサルデザインを取り入れたJリーグオリジナルのデザインとなり、書体名称は「J.LEAGUE KICK」となります。

●視認性向上の取り組みについて

これまでのネーム&ナンバーのデザイン選定には視認性を確保するための基準などが明確に定められておらず、観戦・視聴環境によっては背番号の視認が困難な場合もありました。今シーズンよりユニバーサルデザインを取り入れた統一デザインを採用することで、使用するネーム&ナンバーとユニフォームとのカラーコントラストに一定の基準を設け、Jリーグ公式試合全体の観戦・視聴環境の向上につなげていくことを目指しています。



●導入対象試合

Jリーグ公式試合

※Jリーグ規約に定められた「公式試合」の規定に準ずる

明治安田生命Jリーグ(J1、J2、J3)、JリーグYBCルヴァンカップ、FUJI XEROX SUPER CUP、J1参入プレーオフ(2021シーズンは開催なし)

●書体名称 J.LEAGUE KICK (Jリーグ キック)

●使用カラー 白・青・赤・黒・黄

●デザイン Kontrapunkt (コントラプンクト)

●監修

デザイン/ブランディングサポート 株式会社Takram (タクラム)

●カラーユニバーサルデザインサポート

NPO法人カラーユニバーサルデザイン機構(CUDO)

●企画・統括

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)

株式会社Jリーグ

●製作

株式会社Jリーグ/エイブリィ・デニソン・ジャパン株式会社

Jリーグの世界への広がり、世界とのつながり

●世界に広がるJリーグ

2020シーズンは約30の国と地域にJリーグの試合を放映し、東南アジアを中心にJリーグの海外放映が拡大しています。

Jリーグに所属する外国籍選手の活躍を、母国で応援する動きも見られ、2020Jリーグ最優秀選手賞受賞のオルンガ選手(柏レイソル/当時)が出場した2020JリーグYBCルヴァンカップ決勝(2021年1月4日に開催)が海外向けにYouTubeで生配信されると、同選手の母国ケニアの首都ナイロビでは柏レイソルのレプリカユニフォームを着た大勢のファンが集まってパブリックビューイングが開かれるなど、各地で盛り上がりを見せています。タイでは2020シーズンより3シーズン、大手スポーツメディアのSiamsportsと放映権契約を締結し、同社運営によるライブ配信、地上波公共放送局MCOTでの放映と合わせ、2020シーズンのJリーグの視聴回数は合計6,000万回近くに上りました。

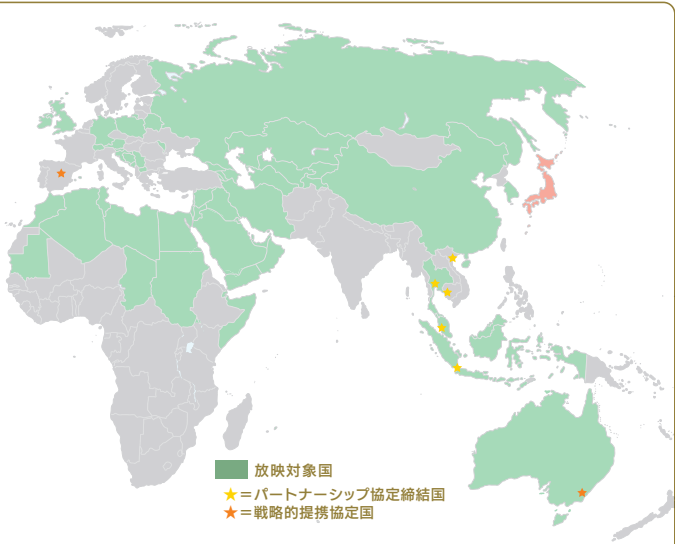
なお、2021シーズンは明治安田生命J1リーグを55の国と地域で、FUJI XEROX SUPER CUPを34の国と地域で放映を予定しています。

また、これまで合計13名の選手がJリーグでプレーしたタイでは、Jリーグの関心度はプレミアリーグ(イングランド)、ラ・リーガ(スペイン)、ブンデスリーガ(ドイツ)に次ぐ高さを誇り、国民の57%がJリーグに関心を寄せているという調査結果が出ています。

●Jリーグと世界とのつながり

Jリーグと日本のつながりに目を向けると、1,687人の登録選手の内、23の国と地域から145名の外国籍選手が所属しています。

選手を通じて選手の母国でのJリーグの関心度の向上、選手を通じた母国のファンとのコミュニケーションの促進やファン・サポーター同士の交流などを通じ、Jリーグが掲げる理念の一つである「国際社会における交流及び親善」が、実現しつつあります。



●2021シーズンJリーグ所属外国籍選手数

(J1、J2、J3合計) 2021年2月1日現在

順位	国籍	選手数
1位	ブラジル	83
2位	大韓民国	22
3位	スペイン	6
	ナイジェリア	6
5位	オーストラリア	3
	オランダ	3
	セルビア	3
	タイ	2
8位	ノルウェー	2
	ベルギー	2

1名：イングランド、ウルグアイ、ケニア、コスタリカ、コロンビア、スウェーデン、中華人民共和国、ドイツ、パラグアイ、ポーランド、ボスニア・ヘルツェゴビナ、マレーシア、モザンビーク



Jリーグが取り組む各種事業

Jリーグはプロサッカーリーグを運営する一方で、Jリーグの理念を実現するために多岐にわたる事業・活動を行っています。

トップカテゴリーのリーグ戦を行い、日本サッカーをより強くしていくための選手育成活動や指導者養成活動。地域に根差したスポーツ文化を醸成するための様々な活動。Jリーグが安定的に活動を継続するための経営基盤の確立や、より多くの方にJリーグに関心を持っていただくための活動など。理念を実現するための具体的な理想像を「ビジョン2030」として定め、各分野で中長期的な計画を策定して事業を推進しています。

■ビジョン2030

Jリーグは、Jリーグの理念の実現に向け、具体的に2030年に実現したい状態を「社会連携」「フットボール」「ファンづくり」「事業強化」「経営基盤」の分野に分け、「ビジョン2030」として決めました。

「ビジョン2030」の実現に向けて、2019年から2022年の4年間で成長エンジンを作るという「中期計画2022」を定め、ビジョンを実現するための戦略を設定していましたが、昨年、新型コロナウイルスの感染拡大と、それに伴うリーグ戦の中断、感染症対策を中心とした予算の見直しを行い「中期計画2020」を凍結させるという決断をせざるを得ませんでした。

しかし、Jリーグがこれまで多くの方々を支えられながら推進してきた事業や、築き上げてきたスポーツ文化を絶やさず、少しでも前進するために、各分野の事業は当初の目標設定や予定を変更しながら続けてまいります。



撮影：2019年



撮影：2019年



撮影：2019年



■2021年度の事業スケジュール (スケジュールは変更になる場合があります)

月	大会	事業スケジュール
1月	●eJ.LEAGUE	●実行委員会 ●理事会 ●NPB・Jリーグ連絡会議(2回)※
2月	●2/20(土)： FUJI XEROX SUPER CUP ●2/26(金)： 明治安田生命 Jリーグ開幕	●新人研修会 ●NPB・Jリーグ連絡会議 ●実行委員会 ●理事会
3月	●3/2(火)：ルヴァンカップ開幕	●Jエリートリーグ、 Jユースリーグ開幕(仮) ●NPB・Jリーグ連絡会議 (2回予定) ●実行委員会 ●理事会 ●総会
4月	●AFCチャンピオンズリーグ (ACL) 開幕(予定)	●NPB・Jリーグ連絡会議 ●ホームタウン活動報告(予定) ●実行委員会 ●理事会
5月	●ルヴァンカップ グループステージ終了 ●ACL グループステージ終了	●5/15(土)：Jリーグの日 ●シャレン！アウォーズ(仮) ●クラブ経営情報開示(速報) ●NPB・Jリーグ連絡会議 ●実行委員会 ●理事会
6月	●ルヴァンカップ プレーオフステージ	●実行委員会 ●理事会 ●6月末：クラブライセンス 申請締め切り
7月	●東京オリンピック	●実行委員会 ●理事会 ●クラブ経営情報開示(最終)
8月	●東京パラリンピック	
9月	●ルヴァンカップ準々決勝 ●ACL ラウンド16、準々決勝	●実行委員会 ●理事会 ●9月末：クラブライセンス交付
10月	●ルヴァンカップ準決勝 ●ACL 準決勝 ●ルヴァンカップ 決勝	●実行委員会 ●理事会
11月	●ACL 決勝	●実行委員会 ●理事会
12月	●明治安田生命 Jリーグ終了 ●Jリーグアウォーズ	●実行委員会 ●理事会

※NPB・Jリーグ新型コロナウイルス対策連絡会議／6月以降の開催については未定
6月以降の実行委員会、理事会のスケジュールは変更となる可能性があります。

■Pick Up

●「FIFA 21グローバルシリーズ eJリーグ powered by ひかりTV」開催(2020年12月～2021年1月)
Jリーグは、新たなスポーツ分野への挑戦として、2018年よりeスポーツに参入し、エレクトロニック・アーツ社(EA)のゲーム「EA SPORTSTM FIFA」シリーズを用いたeスポーツ大会を「eJ.LEAGUE」として開催しています。

本大会は、2018年より国際サッカー連盟(FIFA)が開催する「EA SPORTSTM FIFA」シリーズを用いた「eWorld Cup」の出場権をかけた予選大会、または出場資格を得るためのポイント取得を可能とする大会「EA SPORTSTM FIFAグローバルシリーズ」に指定され、世界につながる大会として位置付けられています。

2020年度は当初の予定からスケジュールや大会方式を変更したものの、2020年12月～2021年1月にかけて「FIFA 21グローバルシリーズ eJリーグ powered by ひかりTV」として開催しました。

近年ではJクラブのeスポーツ参入も活性化し、eスポーツ選手を保有するクラブも増加。中にはFIFA主催の国際大会で活躍する選手も現れ、eスポーツを通じてサッカーやスポーツ以外のジャンルへの挑戦、スポーツの新しい楽しみ方の提供など、その可能性は広がっています。

●シャレン！アウォーズ(5月予定)

Jリーグは社会課題や共通のテーマに、Jリーグ・Jクラブが複数の企業や団体、地域と取り組む社会連携活動を「シャレン！活動」と銘打ち、2018年から本格的なシャレン！活動の活性化に取り組んでいます。

2020年の全クラブ社会連携(シャレン！)活動の中から、特に社会に幅広く共有したい活動を「2021 Jリーグシャレン！アウォーズ」として表彰し、今年も5月中旬に発表、表彰予定です。昨年ソーシャルチャレンジャー賞を獲得した大宮アルディージャの「手話応援デー」など、受賞年度だけでなく、障がいがある方とともにスタジアムでサッカーを楽しむ取り組みを10年以上継続し、地域に欠かせない存在となっている取り組みもあります。今後も表彰を通じてJリーグ、Jクラブが取り組む「シャレン！活動」を広く社会に伝えていきます。(社会連携活動についてはP14以降をご参照ください。)

●育成年代の大会を刷新。Jエリートリーグ、Jユースリーグを開催

Jリーグは、「2030 Jリーグフットボールビジョン」に基づいた活動の一環として、育成年代の試合環境の整備を行い、2021年度よりU-21以下の選手を対象とした「Jエリートリーグ」の開催、「Jユースカップ Jリーグユース選手権大会」をリニューアルしたU-17以下の選手を対象とした「Jユースリーグ」を開催します。併わせて2008年より開催する「JリーグU-14」も開催します。

日本国内ではJリーグを頂点としたトップリーグから、U-18、U-15を対象にした育成年代の大会が充実して開催されている中、試合出場機会の少ない若手プロ選手や、U-17年代、U-14年代を対象とした大会を開催することで、あらゆる年齢の選手の試合機会の創出を図ります。(フットボール事業に関する詳細はP10～13以降をご参照ください。)

Jリーグが取り組むフットボール事業について

はじめに

Jリーグは「ビジョン2030」のフットボール領域において目指す姿として、「Jリーグに世界的な選手を輩出するグレートアカデミーがある」「日本型人材育成システムで世界の5大リーグに名を連ねる」と定めています。ビジョン実現のため「世界で最も人が育つリーグ」を合言葉に、選手育成環境の向上から、トップの強化まで、育成と強化のサイクルを循環させる施策を実践しています。

日本最高峰のサッカーリーグであるJリーグでは、これまで自クラブで育った選手を起用するホームグロウン制度、外国籍選手枠の増加などによる強化施策や、J1へのビデオアシスタントレフェリー（VAR）の導入によるフットボールの水準向上を図ってきました。

育成面では2019年より「プロジェクトDNA」を導入し、育成にかかわる人材の養成、アカデミー評価基準などによる育成環境の評価や、クラブの育成理念を明確化し、実際の育成活動への反映に取り組んでいます。

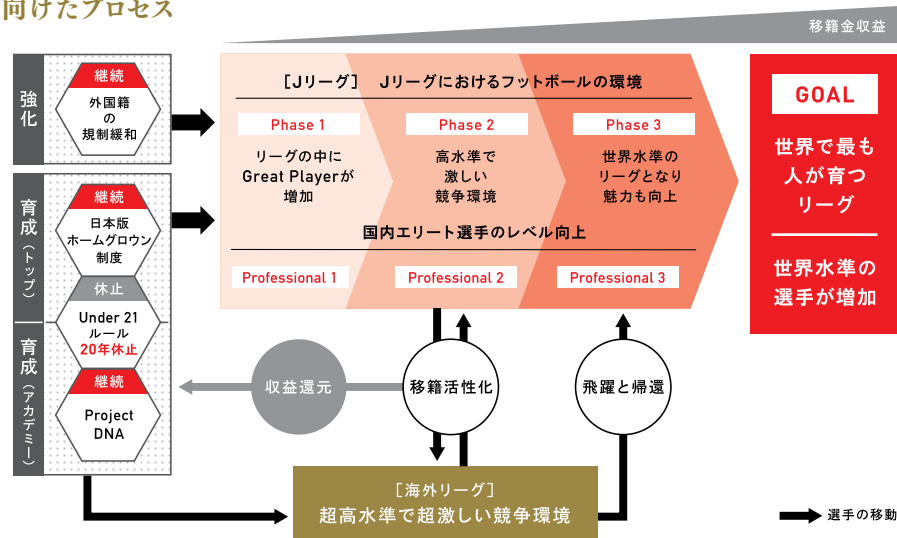
2030 Jリーグフットボールビジョン ～世界で最も人が育つリーグへ～

- 世界的な競技水準になっている
- 全クラブが地域に根差した個性的なクラブフィロソフィーをもっている
- 日本型のフットボール人材育成システムで、世界最高水準の選手・指導者・スタッフを輩出している
- 世界各国を代表する選手・指導者・レフェリーが活躍している
- 1試合も欠くことなく安全・安心・確実にフェアな試合を提供している
- 年齢・性別・障がい・人種などに関わりなく、だれもが、いつでも、どこでもスポーツを楽しんでいる

世界で最も人が育つリーグの実現に向けたプロセス

2030 Jリーグフットボールビジョン「世界で最も人が育つリーグへ」を実現するために、アカデミーの選手育成とトップの強化のサイクルを循環させる事業モデルを設定しています。

外国籍選手枠の増加、J1へのVAR導入などのトップへの対応と、Jクラブアカデミーをアカデミー評価システムによって評価、サポートし、選手育成に関わる優秀なフットボール人材の養成、選手の育成を行っています。育った選手が高水準の試合機会を得るためのホームグロウン制度の導入、U-21選手出場を奨励するなど、各分野の成果を有機的に循環させ、ビジョンの実現を目指しています。



Process 1: 育成の成果を国内強化策で加速させる

Jクラブの育成年代の選手たちが、年齢カテゴリーを超えて活躍する土壌をつくり、トップカテゴリーが育成年代の強化の場でもありととらえる。若年層のうちに国内のみならず海外での活躍も積極的に促し、日本サッカーの水準の底上げを図る。

Process 2: 日本と世界のボーダーレス化を促進

選手の海外進出を促し、さらに海外で活躍した選手が再び日本で活躍する、といった国境を越えた選手強化のサイクルをつくり、選手育成・強化のボーダーレス化を促進する。

Process 3: 選手の価値をクラブに還元する

Jクラブのアカデミーで育った選手が、国内外の他クラブに移籍し活躍の場を広げることで、移籍金やトレーニングコンペンセーションなどによってその選手の価値を育てたクラブに還元するサイクルを活性化させる。もちろん、自クラブのアカデミーから加入した選手は、すでにクラブのエンブレムをつけてプレーすることの意味を理解しており、その選手がトップチームの試合のピッチに立つということは、ホームグロウンプレイヤーとして地域からも応援されることを意味しており、ROI（投資利益率）としては簡単には算出できない価値をもっている。

■プロジェクトDNAとは

2019年よりスタートした育成の重点施策を実施するプロジェクトです。

「選手や指導者が本来持っているさまざまな資質を紡ぐ」というコンセプト「**D**eveloping **N**atural **A**bilities」の頭文字をとって「プロジェクトDNA」と名付けています。

このプロジェクトを通じて、進化し続ける世界のサッカーに見合った指導者や選手を育成することを目的とし、日本独自の文化や環境を十分に考慮して日本人のDNAとして受け継がれるアイデンティティをベースに日本型人材育成システムの確立に向けて取り組んでいます。



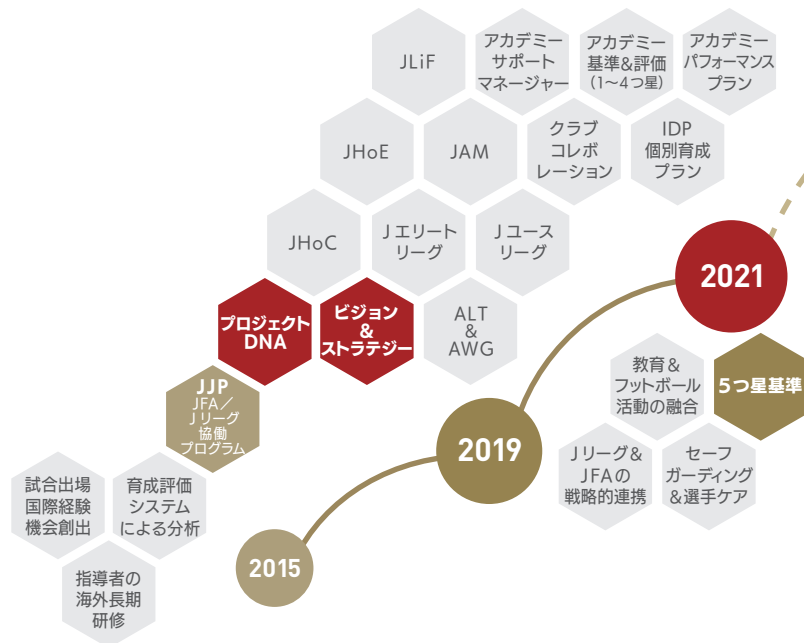
【プロジェクトDNAにおける6つの重点施策】

- ① ビジョン＆ストラテジー：ビジョン達成に向けた戦略立案
- ② 人材育成：JHoC、JAM 他
- ③ サポート：パフォーマンス・プラン、IDP 他
- ④ 評価：品質保持のための制度作り
- ⑤ ゲーム：試合環境整備
- ⑥ 選手教育：JHoE、新人研修、プレプロ研修、よのなか科など

■フットボールビジョンの成長曲線

Jリーグが選手育成・強化において重視しているのは、すでに定めているベンチマークに向けた成長曲線と、そのベンチマークの先の目標、ビジョンに向けて定める成長曲線、すなわち「セカンドカーブ」を同時に意識してプロジェクトに取り組むことです。目標達成後にプロジェクトのベクトルが現状維持の水平線や下降線をたどることにならないよう、連続した成長曲線を描くための新たな目標を常に定めながらプロジェクトを進めていきます。

JリーグやJクラブがこれまで取り組んできた選手育成・強化、指導者養成の実績を、大きな成長曲線を描くジャンプアップのための十分な助走ととらえ、プロジェクトDNAの導入によってセカンドカーブを意識した、連続した成長を実現させることで、「ビジョン2030」の達成を目指します。



ビジョン2030 ～世界で最も人が育つリーグへ～

- Jリーグに世界的選手を輩出するグレートアカデミーがある
- 日本型育成システムで世界の5大リーグに名を連ねる

●プロジェクトDNA導入後

2019年に、アカデミー評価基準に基づいた各クラブの育成におけるビジョン＆ストラテジーの生成、アカデミー内でコーチを育成する立場の人材を目的としたJリーグヘッドオブコーチング養成コース（JHoC）など、Jクラブの育成組織を次のステージに押し上げる「プロジェクトDNA」をスタートしました。

2019年、2020年は、各クラブの育成哲学（フィロソフィー）を明確にし、「ビジョン＆ストラテジー」を形成する「Project DNA-to the FUTURE」の発行、アカデミー評価制度の導入、JHoCをはじめとする人材育成コースの実施、育成年代の試合機会創出として、育成年代の大会整備などを行ってきました。

■2021年度の活動 ～計画から実行のフェーズへ

2021年は、JHoC第1期修了生11名が、養成コースの学びを生かし、各クラブのフィロソフィーのもとで実践する年となります。また、昨年新型コロナウイルス感染症拡大の影響で実施できなかったJエリートリーグや育成年代の大会を開催する、計画から実行のフェーズに移行する年となります。

フットボール事業として取り組む事業は、プロジェクトDNAの成功に不可欠な要素に基づいて設計されています。

2021年度のフットボール事業



2021年度のフットボール事業活動詳細

■試合出場機会の創出 ～ストレッチと統合のモデルをつくる

これまで育成年代においては、年代別の大会を開催し、主要大会を短期的なトーナメント戦からリーグ戦に移行するなど、シーズンを通じて試合を開催することで試合出場機会を創出してきました。これにより、U-18、U-15カテゴリーではリーグ戦や各種大会が充実してきましたが、育成年代の選手を強化するためにはまだまだ課題があります。

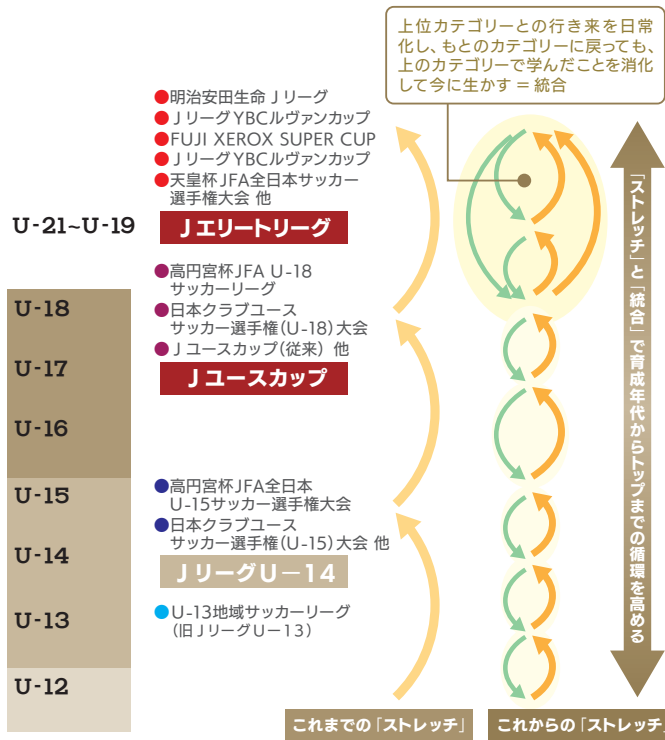
年代別の大会では、各年代の年長選手がチームの中心となり、下の年齢の選手が出場機会を得られにくいこと。「飛び級」で上のカテゴリーに出場する選手数は限られ、仮に「飛び級」をしても、身体的な差によって実力を発揮できない、負傷によって選手としての可能性を失ってしまう場合があるといったリスクがあること。上のカテゴリーでの課題を、元のカテゴリーに戻ったときに解消する仕組みがない、などです。また、ユース年代を卒業した22歳以下の若年層のトップカテゴリーの選手においても試合出場機会の創出は、長年の課題でもあります。

世界を見渡すと、ワールドクラスの活躍をする選手は年々若くなっています。Ｊリーグが世界に伍するリーグとして、世界的な選手を多数輩出するためには、育成年代の選手、若年層のトップカテゴリーの選手が恒常的に試合出場機会を得られ、適切なレベルで試合経験を積む環境を整備することは不可欠であり急務であるといえます。

●「ストレッチ」と「統合」

この課題を解決するために、全ての年齢の選手に試合機会をつくり、「飛び級」となる「ストレッチ（背伸び）」の幅を適切にすること。多くの選手にストレッチをするチャンスを与え、常に高いレベルで試合をする機会を創出する必要があります。そして、ストレッチによって上のカテゴリーに出場した選手が、仮に自分のカテゴリーに戻った時には、上のカテゴリーでの課題が適切に解決できること。トップカテゴリーから下のカテゴリーまでの循環を「統合」して強化のサイクルを推し進めること。これを実現するために、2021年度は若年層の大会創出、育成年代の大会改革に着手します。

【年代別大会構造と「ストレッチ」と「統合」のイメージ】



●若手の育成を加速する ～Ｊエリートリーグを開催

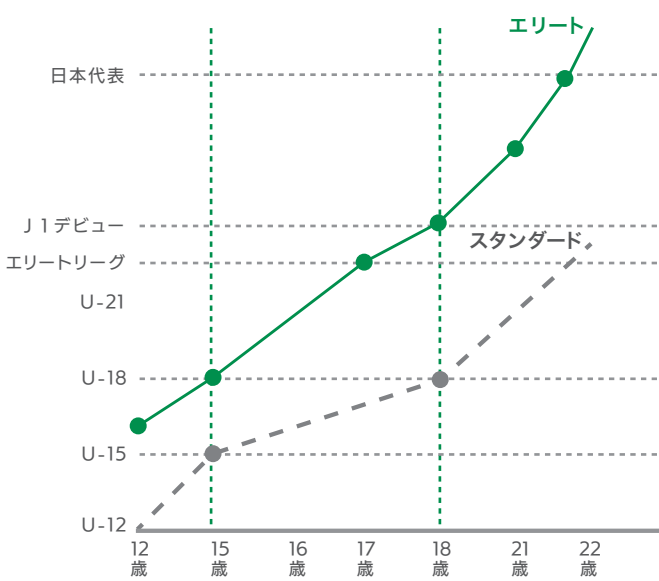
「若手の育成を加速する」ことを目的に、21歳以下の選手を対象としたリーグ戦を、年間を通じて開催します。

2014年にスタートした明治安田生命Ｊ３リーグでは、22歳以下の選抜チームや、Ｊ１クラブのU-23チームが参加し、これにより参加クラブの若手選手に常にトップカテゴリーの試合出場機会を創出することができました。さらには、トップの若手選手だけでなく、U-18チームの選手たちがプロと同じ舞台で試合ができるなど、参加した選手やクラブにとって非常に価値ある機会となりました。Ｊエリートリーグは、この機会をさらに多くのクラブが得られるよう、希望するクラブが参加できるリーグ戦となります。

Ｊエリートリーグは出場クラブをエリアごとに分類してリーグ戦を実施します。日程や移動の負担を縮小しながら、日常的な試合出場機会の創出を実現します。さらには、ユース年代の選手の「ストレッチ」の場となることも期待しています。

育成年代の内に、Ｊエリートリーグでトップチームに所属する選手との試合出場機会を持ち、さらにその上のＪリーグで活躍する選手となる可能性を伸ばす大会としても位置付けています。

【選手の成長曲線イメージ】



●全ての年齢の選手に試合出場機会を ～Ｊユースカップをリニューアル

今シーズンより、ユース年代の三大タイトルの一つとしてＪリーグ開幕年より開催してきた「Ｊユースカップ」Ｊリーグユース選手権大会」をリニューアルして開催します。

Ｊユースカップは、Ｊクラブのユース(U-18)チームと、日本クラブユースサッカー連盟所属チームを若干数加えたノックアウト方式のトーナメント戦を行ってきました。2021年からは、Ｊクラブのユースチームを対象に、エリアごとのグループステージ(リーグ戦)を行い、グループステージの上位チームによるノックアウト方式のトーナメント戦を行います。試合数を増やすことで試合出場機会を増やすだけでなく、対象年齢を18歳以下から17歳以下とし、試合出場機会が少ない選手の出場機会を創出します。これにより、ユース年代より下の年齢の選手の「ストレッチ」の場となることも期待しています。

※ＪエリートリーグとＪユースカップの詳細は2021年3月に発表します。

●これまでの育成年代の強化について

Ｊリーグは、2002年から「Ｊリーグアカデミー」の確立を目指し、本格的な選手育成活動に取り組んでいます。2007年には育成年代の大会で出場機会が得られにくい13歳以下の選手を対象としたＪリーグU-13、翌年からＪリーグU-14を創設しました。(U-13は2014年よりJFA主管でU-13地域サッカーリーグとして開催。)二つの年代のシーズンを通じたリーグ戦の他、U-16チャレンジリーグ、U-17チャレンジカップを短期的に開催するなど、U-18のＪユースカップを頂点に育成年代の大会を開催し、試合出場機会を創出してきました。

同時に国際試合出場機会の創出や、海外でサッカーをする機会を創出するために、U-18以下の各年齢の選抜チームによる海外キャンプや、海外クラブを招聘し、U-16チャレンジカップへの招待や、U-17インターナショナルユースカップを開催してきました。また、JJPの一環として、Ｊクラブの海外キャンプや海外での大会開催に対する経済的な援助を行いました。

■Ｊリーグの人材育成プログラム

「優秀な人材の育成」と「継続学習の機会」のために、Ｊリーグは2019年より独自の3つの人材養成コースと1つのCPD(専門性を維持するための継続学習)の機会を提供しています。

「Ｊリーグヘッドオブコーチング養成コース(JHoC)」、「Ｊリーグアカデミーマネジメント人材養成コース(JAM)」、「Ｊリーグヘッドオブエデュケーション養成コース(JHoE)」の3つの人材育成コースに加え、2021年はサッカー界のリーダーを対象にした「Ｊリーグリーダーズインフットボールイベント(JLiF)」を充実させ、育成年代における将来のリーダー育成やエリートを育成する文化を醸成し、クラブ内において「より良いコーチがより良いプレーヤーを育成する」文化を定着させることを目指します。

また、サッカー界をリードする人材育成の取り組みを通じて、Ｊリーグの全関係者のつながりを構築し、革新的で「世界をリードする」学習機会を経て、ビジョン2030の実現をもたらすスキルや知識をＪリーグの育成年代の関係者とフットボールのリーダーに提供することを目指します。世界のフットボール界で認められる選手育成の先駆者および将来のリーダーを輩出したいという思いがＪリーグの人材育成プログラムの原動力となっています。

【3つの人材養成コースとCPD】

	J.League Head of Coaching Course (JHoC) Ｊリーグヘッドオブコーチング 養成コース Ｊクラブで育成年代のコーチを育てる人材(HoC)を養成
	J.League Academy Management Course (JAM) Ｊリーグアカデミーマネジメント人材 養成コース Ｊクラブのアカデミーをマネジメントする人材(JAM)を養成
	J.League Head of Education Course (JHoE) Ｊリーグヘッドオブエデュケーション 養成コース Ｊクラブで選手教育を担う人材(HoE)を養成
	J.League Leaders in Football Events (JLiF) Ｊリーグのフットボールにおけるリーダーに向けたイベント Ｊクラブの経営層、HoCなどを対象としたオンラインセミナー

●JAM、JHoCを通じた選手育成のストラテジーづくり

Ｊリーグヘッドオブコーチング養成コース(JHoC)、Ｊリーグアカデミーマネジメント人材養成コース(JAM)では、受講者はクラブのビジョンとストラテジーに基づいたマネジメントや選手および指導者の育成を実践することを学びます。

2019年から始めたJHoC第1期生11名は、コースの中で長期的な視野に立った選手および指導者の育成手法を学んだうえに、各自で各クラブのフィロソフィーに基づいて、実践のためにビジョン&ストラテジーの可視化や育成計画を構築しました。

今年、第1期生は自らが設計した選手および指導者の育成計画に基づいて、アカデミーのフットボール部門をマネジメントし、育成を推進していきます。

■選手教育

育成年代に限らず、Ｊクラブに所属する選手がサッカー選手としてだけでなく、一人の社会人として成長し続けるためには、フットボール領域を超えた選手教育を続けることが不可欠となります。

そのためには、クラブの中に長期的な視野に立って選手教育をする人材、ヘッドオブエデュケーションの存在が必要となります。プロジェクトDNAでは、「Ｊリーグヘッドオブエデュケーション養成コース(JHoE)」によってこのような人材を育てると同時に、開幕以降実施してきた新人研修会のブラッシュアップ、育成年代の選手教育プログラムを展開することで、選手教育に取り組んでいきます。

●2021年度のＪリーグ新人研修

Ｊリーグは、当該シーズンの新人選手に対して、社会人としての自覚や行動を促すこと、Ｊリーグの理念の理解を通じてＪリーグにふさわしいブランドを形成し行動を促すことを目的に、新人研修を実施しています。2021年度からは、従来の集合研修からオンラインにて年間を通して実施する方法に変更しました。

チェアマンからのメッセージ、メディア対応について、リスクマネジメントなどLiveやオンデマンドなどの方法で、「Ｊリーグの選手とはどういう存在か」を考え、Ｊリーグの選手として、また一社会人として「価値を高め、守る」術を学んでいます。2月19日現在で204名の選手が研修に参加しています。

●セーフガーディングへの取り組み

育成年代からトップのチームを保有し、地域に根差したスポーツクラブとして活動するＪクラブは、年齢、性別、立場など、多様な人材が所属し、それらを取り巻く多くの関係者が存在します。また、クラブの活動はクラブハウスや練習場の中だけでなく、練習、移動、試合など、日常から大会参加まで、様々な環境で活動が行われています。しかし、こうした活動は常にリスクと隣り合わせであると考えられています。

Ｊリーグは、クラブに関わる人たちが、安全な環境で安心して活動に取り組めるよう、「セーフガーディング」という概念を導入して、選手育成の環境からオン&オフザピッチにおいて、誰もが前向きに安心して活動に取り組める環境を目指していきます。

【セーフガーディングとは】

誰もが人として尊重され、受け入れられ、認め合う環境をつくり、児童、青少年、弱い立場にある大人(スタッフも含む)が安心して活動でき、楽しい経験が得られるサッカー環境を提供することです。

〈ビジョン〉

オン&オフザピッチにおいて、誰もが前向きに、安心して取り組むことができ、お互いを受け入れ、人の成長と模範的な振舞いを促すことのできるサッカー環境を設ける。

〈セーフガーディングの定義〉

- 児童や青少年に対して
 - －安心して活動できる環境づくりを推進し、危害から守る。－虐待や不適切な取り扱いから守ること／健康や成長を阻害しない／成長を促す安全環境とケアを施した環境を提供する／すべての児童や青少年を最優先した行動をとれるようにする
- 大人に対して
 - －虐待などを見て見ないふりをしない、安全な生活を送る権利を確保する。－かかわるスタッフや組織が協力し合う／保護責任の放棄や虐待発生を防ぐ／弱い立場にある大人が身体的・精神的・社会的に良好な状態で活動できるようにする

Jリーグが取り組む社会連携活動

はじめに

Jリーグは豊かなスポーツ文化の振興を理念に掲げ、地域社会と一体となったクラブづくりを行うことをリーグの設立趣旨とし、理念を実現するための活動の総称として「Jリーグ百年構想」というスローガンを掲げて、スポーツ振興活動、ホームタウンとクラブを結びつける「ホームタウン活動」、社会と連携して地域の課題を解決する「社会連携活動」を行っています。リーグ設立から四半世紀を超え、間もなく30周年を迎えるあいだ、JリーグとJクラブは多岐にわたる活動を続けています。

手探りで始めた活動も長きにわたる継続で定着し、現在ではクラブとホームタウンを結ぶだけでなく、スポーツの垣根を越えて地域や社会の課題解決にまで発展しています。

■スポーツ振興活動 ～スポーツでもっと幸せな国へ～

「豊かなスポーツ文化の振興」を実現するために、Jリーグ開幕から3年後の1996年に「Jリーグ百年構想」を掲げ、スポーツ振興活動に本格的に取り組みはじめました。各クラブのホームタウンならではの施策をJリーグが支援し、今では10年、20年を超える施策もあります。

スポーツ振興活動では、サッカー以外のスポーツを積極的に推進し、子ども達やグラスルーツを対象とした大会から、全国レベルやオリンピックを目指す競技活動まで対象者や競技レベルは様々です。

今ではJリーグの支援から独立した活動や、クラブのリソースで発展している活動も多く、中でもトップレベルのスポーツシーンでの活躍が見られ、バスケットボール(Bリーグ)やフットサル(Fリーグ)に参加するチームもあります。今年、コンサドーレカーリングチームの全日本選手権3連覇したことは記憶に新しいところです。



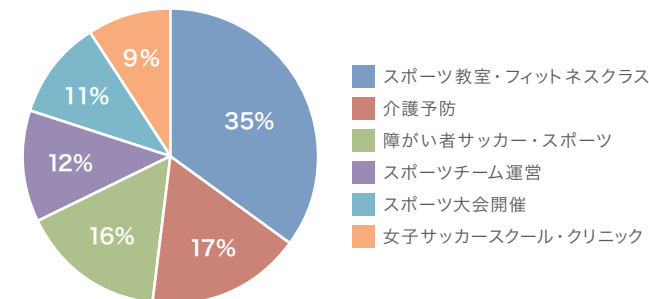
●2021年度のスポーツ振興活動

2021年は33クラブから88種類のスポーツ振興活動にJリーグとして支援することを予定しています。

スポーツ振興活動の対象となるスポーツは、サッカー以外の各種スポーツのチーム運営、年間を通じて行われるフィットネスクラスやスポーツ教室、10年、20年以上の実績を持つ大会など、多岐にわたっています。



【スポーツ振興活動実施割合】



●ホームタウンのコミュニティとして

2006年に施行された改正介護保険法に基づく介護予防普及事業の一環として、2007年から2009年に厚生労働省と連携して「Jリーグ介護予防事業」を展開して以来、子ども達や若年層を対象とした活動以外に、高齢者を対象とした健康体操教室などを継続して行っています。

こうした活動は、単に介護予防を目的としたスポーツ教室などにとどまらず、地域の人々が集まるコミュニティの場として親しまれています。



●多様性への取り組み。バラスポーツも充実

Jクラブのスポーツ振興活動では、年齢、性別、障がいの有無にかかわらず、あらゆる人々にスポーツを楽しむ機会を創出しています。

スポーツ振興活動を本格化した当初から、障がい者向けのサッカーへの取り組みが行われ、視覚障がい者を対象としたブラインドサッカー、知的障がい者向け、電動車いすサッカーなど、チーム運営から大会の開催まで、年間を通じた活動が盛んに行われています。



●スポーツ基本法制定から10年

昭和36年に制定されたスポーツ振興法制定から50年後、そしてJリーグ設立から約20年後の2011年8月に、スポーツの推進のための基本的な法律として「スポーツ基本法」が成立されました。

Jリーグは30年前の1991年の設立当初から豊かなスポーツ文化の振興を理念に掲げ、現在では全57クラブが40の都道府県でプロサッカーチームの運営とともにスポーツ振興活動やスポーツを通じた地域振興活動を行っています。

今年予定されている東京オリンピック・パラリンピック終了後、日本国内では改めてスポーツの持つ価値や今後のスポーツの在り方が見直されることになると考えられます。

Jリーグはこれからも日本のスポーツ振興の旗振り役として活動していきます。



■社会連携活動 ～スポーツが持つ「つなげる力」を信じて。

ホームタウンを持つプロスポーツリーグとして、地域社会の一員であり続けること。そのために、Jクラブはホームタウンと積極的にかかわる活動を行ってきました。

地域の一員であることを認めてもらうために始めた活動は、サッカーやスポーツを通じて街を活性化させること、「ホーム」となるスタジアムやクラブの施設を街の「機能」として活用すること、子ども達の勉強や学び、地域の産業のお手伝いをするなど、地域の課題を解決する

活動にまで発展していきました。その活動はJクラブだけにとどまらず、自治体や地域の企業や団体などが、それぞれの得意分野や機能、リソースを出し合って、クラブと一緒に活動に参加しています。

週末のスタジアムに何千人、何万人と人が集まるように、スポーツには、人と人や、スポーツ以外の何かと何かをつなげる力がある。こうした可能性を広げるための活動を今後も続けていきます。

●SDGsにつながるホームタウン活動

「ホームタウン活動」は、全クラブ合計で2019年には25,000回を超える活動が行われています。これらの活動を紐解くと、すべての人が健康になるための取り組みや、資源や環境問題対策など、社会が抱える課題に向き合うきっかけや課題解決につながる活動もあります。

2015年に国連が「持続可能な開発目標(SDGs)」を中核とする「持続可能な開発のための2030」アジェンダを採択し、世界規模でアジェンダ実施のための行動が求められていますが、ホームタウン活動の中にも、SDGsにつながる活動があります。

Jリーグは2020年のホームタウン活動をSDGsに紐づけて分類し、活動がどのような社会課題の解決につながっているかをまとめ、2021年春に活動報告を予定しています。



●Jリーグの社会連携活動「シャレン！」

社会課題や共通のテーマ(教育、ダイバーシティ、まちづくり、健康、世代間交流など)に地域の人・企業や団体(営利・非営利問わず)・自治体・学校などとJリーグ・Jクラブが連携して取り組む社会連携活動を「シャレン！」と総称して2018年より本格的に取り組んでいます。

「シャレン！」活動は、3者以上の協働者と、共通価値を創る活動を想定しており、それらの社会貢献活動等を通じて、地域社会の持続可能性の確保、関係性の構築と学びの獲得により、活動にかかわる企業や団体の価値の再発見につながるものと考えています。

Jリーグでは、「Jリーグをつかって社会をよくする活動」についてたくさんの方々に関心を持っていただき、一緒に考えていただくために専用のホームページで、社会をよくするアイデアを募集しています。



[2020 JリーグYBCルヴァンカップ決勝より 左：センサリアルーム(仮設)観戦企画(発達障がい児家族招待)／右：障がい者の方の就労体験(精神・知的障がい者による事前準備)]

■復興支援活動 ～いつまでも忘れない。継続した支援のために。

2011年3月11日に起きた東日本大震災から、今年で10年が経ちます。10年の時を経てだいぶ復興は進みましたが、今なお震災の爪痕に苦しんでいる方は多くいます。

プロサッカーリーグに携わる自分たちにできることはないのか。震災直後から「チカラをひとつに -TEAM AS ONE-」というスローガンを掲げ、物心両面から支援を行い、現在もスローガンの精神を引き継いで、大規模災害に対する支援を行っています。

●地域や国境を越えた支援の広がり

東日本大震災直後、応援するクラブの垣根を越えて各地域のホームタウンから被災地の支援に広がりました。Jリーグ設立から20年の中

で、Jクラブは地域に根差したスポーツクラブであり続け、応援するクラブは違っても、長い間クラブ同士、ファン・サポーター同士で交流を続けてきたからこそ、地域を越えた支援ができたと考えています。



[2011年3月：JFAハウスに集まったファン・サポーターによる支援物資仕分け作業／大宮選手バスによる物資の運搬]

ホームタウンのために戦う選手たちの姿は、被災された人たちや、支援に携わる人たちに大きな励みとなりました。また、Jリーグの国際事業として、Jクラブとともに地震の多いアジアの国々に防災の意義やノウハウを伝達する取り組みも行い、国境を越えた活動にまで広がっています。



●スポーツは心のライフラインに。スタジアムは街のインフラに。

生活必需品の次に求められたのは、心から笑顔になれる時間や思い切り体を動かしてスポーツや遊びを楽しめる場所や機会でした。

Jクラブや選手たちは、これまでのホームタウン活動や普及活動で培ったノウハウを使って、被災地に笑顔を届ける活動を継続しています。

そして、街の大規模施設であるスタジアムが、避難場所や備蓄施設などとして活用されています。スタジアムやクラブの施設が街のインフラになることは、新たなスタンダードになりつつあります。



●TEAM AS ONEの精神をつなぐ

スローガンを掲げてから今日まで、スタジアムやJリーグ、Jクラブが主催するイベント・行事などで、「JリーグTEAM AS ONE募金」を行い、被災地のスポーツ環境を整えるための設備の寄付や、復興支援活動の原資としてきました。現在では、「TEAM AS ONE助成」として、2011年から2020年に起きた災害に対する復興支援活動の原資としています。

昨年3月11日からはクラウドファンディングを活用した募金窓口を新たに設置しています。コロナ禍においても「TEAM AS ONE」の精神をつなげ、被災した地域に寄り添った復興支援活動を今後も継続していきます。

対象となる災害：
平成23年東日本大震災、平成28年熊本地震、平成30年7月豪雨災害、平成30年北海道胆振東部地震、令和元年東日本台風、令和2年7月豪雨など梅雨前線等による一連の災害



Jリーグの沿革

1988年 3月	日本サッカーリーグ (JSL) が第1次活性化委員会設置
10月	第2次活性化委員会
1989年 3月	JSLが、日本サッカー協会 (JFA) に「日本サッカーリーグの活性化案」提案
6月	JFAが「プロリーグ準備検討委員会」設置
10月	プロリーグへの参加条件を立案
1990年 3月	プロリーグ参加条件決定
6月	20団体より参加希望の回答あり
8月	プロリーグ検討委員会 (91年1月まで6回開催)
1991年 1月30日	「プロサッカーリーグ設立の経緯について」報道発表
2月14日	「プロサッカーリーグ参加団体 (10団体)」発表
3月 1日	「プロリーグ設立準備室」開設 (室長：川淵三郎・現JFA相談役)
7月 1日	プロリーグ正式名称「(株)日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」、Jリーグロゴマーク発表
11月 1日	「社団法人 日本プロサッカーリーグ」設立 川淵三郎が初代チェアマンに就任
1992年 3月 6日	選手登録、移籍規定改定と「プロ選手統一契約書」を発表
5月	「Jリーグ・プレスプレビュー」開催。10クラブのプロフィール、ユニフォームなどJリーグの全容を発表
9月	Jリーグ初の公式試合「'92 Jリーグヤマザキナビスコカップ」開催。優勝：ヴェルディ川崎
1993年 3月	ジェイ・エス・エル商事 ㈱から「(株) Jリーグエンタープライズ」に社名変更
4月 1日	Jリーグ規約施行
4月	「Jリーグ映像 ㈱」設立
4～5月	日本代表がFIFAワールドカップアメリカ'94アジア地区1次予選を突破
5月	初の外国人審判員マーチン・ボデナム氏 (イングランド) 招へい
5月15日	Jリーグ開幕 プロサッカーとして初のリーグ戦「'93 Jリーグサントリーシリーズ」がスタート
7月	Jリーグ初のオールスターサッカー「'93 JリーグKodakオールスターサッカー」(神戸ユニバー記念競技場) 開催
10月	FIFAワールドカップアメリカ'94アジア地区最終予選敗退
12月	「Jリーグフォト ㈱」設立
1994年	ベルマーレ平塚、ジュビロ磐田が新加入／12クラブ
3月	「延長サドデンス方式」を「Vゴール」に名称変更
10月	「スポーツタフ研究会」発足
1995年	柏レイソル、セレッソ大阪が新加入／14クラブ
8月	横浜フリューゲルスがアジアスーパーカップ優勝
12月	「セキュリティ研究会」発足
1996年	京都パープルサンガ、アビスパ福岡が新加入／16クラブ
3月	「Jリーグ百年構想」をキーワードにした、プロモーション展開発表
5月	「(株)日本フットボールヴィレッジ (Jヴィレッジ)」設立
1997年	ヴィッセル神戸が新加入／17クラブ
1998年	コンサドーレ札幌が新加入／18クラブ FIFAワールドカップフランス'98に日本代表初出場



〔1991年1月30日〕「プロサッカーリーグ設立の経緯について」報道発表



〔1992年11月23日〕'92 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝



〔1993年5月15日〕Jリーグ開幕



〔1996年3月〕
「Jリーグ百年構想」をキーワードにした
プロモーション展開発表



〔1998年6月〕日本代表がFIFAワールドカップに初出場 (フランス)

1999年 2月	横浜マリノスと横浜フリューゲルスが合併 1・2部制開始 〈J1・16クラブ〉 鹿島アントラーズ、浦和レッズ、ジェフユナイテッド市原、柏レイソル、ヴェルディ川崎、横浜F・マリノス、ベルマーレ平塚、清水エスパルス、ジュビロ磐田、名古屋グランパスエイト、京都パープルサンガ、ガンバ大阪、セレッソ大阪、ヴィッセル神戸、サンフレッチェ広島、アビスパ福岡 〈J2・10クラブ〉 コンサドーレ札幌、ベガルタ仙台、モンテディオ山形、大宮アルディージャ、FC東京、川崎フロンターレ、ヴァンフォーレ甲府、アルビレックス新潟、サガン鳥栖、大分トリニータ
4月	ジュビロ磐田がアジアクラブ選手権優勝
6月	Jリーグゼネラルマネージャー (GM) 講座が始まる
11月	ジュビロ磐田がアジアスーパーカップ優勝
2000年	水戸ホーリーホックがJ2に新加入 J1・16クラブ、J2・11クラブ
2001年	横浜FCがJ2に新加入／J1・16クラブ、J2・12クラブ
2002年	2002 FIFAワールドカップを日本と韓国が共同開催 「Jリーグ・アカデミー」発足 「Jリーグキャリアサポートセンター」発足 JFAが「スペシャルレフェリー (SR)」制度導入。岡田正義氏、上川徹氏の2人が初代SRに
7月	鈴木 昌が第2代 Jリーグチェアマンに就任
2003年 3月	日本・中国・韓国の3カ国のリーグチャンピオンなどが競う「A3チャンピオンズカップ」が始まる 延長戦 (Vゴール) が廃止となる
9月	東京都文京区本郷に「JFAハウス」完成 JFA、Jリーグ、各種サッカー関係団体が一堂に集まる
2005年	J1が2ステージ制から1ステージ制へ ザスパ草津、徳島ヴォルティスがJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・12クラブ
2006年	愛媛FCがJ2に新加入／J1・18クラブ、J2・13クラブ
3月	Jリーグ準加盟制度発足
6月	2006 FIFAワールドカップドイツに日本代表出場
7月	鬼武 健二が第3代 Jリーグチェアマンに就任
2007年 4月	Jリーグ U-13が始まる
11月	浦和レッズがAFCチャンピオンズリーグ優勝
12月	FIFAクラブワールドカップに浦和レッズが出場 (3位)
2008年	ロアッソ熊本、FC岐阜がJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・15クラブ Jリーグ U-14が始まる Jリーグ映像 ㈱から「(株) Jリーグメディアプロモーション」に社名変更
11月	ガンバ大阪がAFCチャンピオンズリーグ優勝
12月	FIFAクラブワールドカップにガンバ大阪が出場 (3位)
2009年	栃木SC、カタレ富山、ファジアーノ岡山がJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・18クラブ アジアサッカー連盟加盟国の選手登録枠 (アジア枠) を導入
3月	Jリーグ公式試合通算入場者数が1億人を突破
12月	鹿島アントラーズが史上初のJ1リーグ戦3連覇を達成



〔1999年〕1・2部制開始



〔2002年〕FIFAワールドカップ 日韓共催



〔2002年〕Jリーグアカデミー発足 ※写真はJリーグU-13



〔2007年〕浦和レッズがAFCチャンピオンズリーグにJクラブとして初優勝。
翌年はガンバ大阪が優勝



〔2009年〕Jリーグ公式試合通算入場者数が1億人を突破

2010年	ギラヴァンツ北九州がJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・19クラブ
6月	2010 FIFAワールドカップ南アフリカに日本代表出場
7月	大東 和美が第4代 Jリーグチェアマンに就任
2011年	ガイナーレ鳥取がJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・20クラブ
3月	東日本大震災発生（3/11）。 4月23日まで公式試合の開催を中止
11月	FIFAクラブワールドカップに柏レイソルが出場（4位）
2012年	F C町田ゼルビア、松本山雅F CがJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・22クラブ
2月	クラブライセンス制度導入
3月	20回目のJリーグ、Jリーグヤマザキナビスコカップ開催
4月	「公益社団法人 日本プロサッカーリーグ」へ移行
12月	FIFAクラブワールドカップにサンフレッチェ広島が出場（5位）
2013年	V・ファーレン長崎がJ2に新加入。F C町田ゼルビアがJFLに降格／J1・18クラブ、J2・22クラブ
12月	中村俊輔（横浜F・マリノス）が史上初となる2度目のJリーグ最優秀選手賞を受賞
2014年	カマタマーレ讃岐がJ2に新加入 明治安田生命 J3リーグがスタート グルージャ盛岡、ブラウブリッツ秋田、福島ユナイテッドF C、F C町田ゼルビア、Y. S. C. C. 横浜、S C相模原、AC長野パルセイロ、ツエーゲン金沢、藤枝MYFC、F C琉球がJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・11クラブ Jリーグ・アンダー22選抜を創設、明治安田生命 J3リーグに参加 Jリーグ提携リーグの選手登録枠（提携国枠）を導入
1月	村井 満が第5代 Jリーグチェアマンに就任 特任理事を新設
6月	2014 FIFAワールドカップブラジルに日本代表出場
2015年	レノファ山口F CがJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・12クラブ J1の大会方式を1ステージ制から2ステージ制およびチャンピオンシップに変更 J1・J2・J3リーグ戦を「明治安田生命 Jリーグ」として、チャンピオンシップを「明治安田生命 Jリーグチャンピオンシップ」として開催
5月	Jリーグヒューマンキャピタル開講
11月	大久保嘉人（川崎フロンターレ）が史上初となる3年連続3回目の得点王を獲得
12月	FIFAクラブワールドカップにサンフレッチェ広島が出場（3位）
2016年	鹿児島ユナイテッドF CがJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・13クラブ J1・J2クラブのU-23チーム（F C東京、ガンバ大阪、セレッソ大阪）がJ3リーグに参加 Jサテライトリーグを再開
6月	JリーグヤマザキナビスコカップがJリーグYBCルヴァンカップに名称を変更 明治安田生命 J3リーグとJリーグYBCルヴァンカップで追加副審を導入
9月	（一助）スポーツヒューマンキャピタルを設立
12月	FIFAクラブワールドカップに鹿島アントラーズが出場（準優勝）



〔2011年3月11日〕 東日本大震災発生。4月23日まで公式試合の開催を中止。
「TEAM AS ONE」をスローガンにした復興支援活動を実施



〔2013年〕 中村俊輔（横浜FM／当時）が史上初となる2度目の最優秀選手賞を受賞



〔2014年〕 明治安田生命 J3リーグがスタート



〔2015年〕 大久保嘉人（川崎F／当時）が史上初となる3年連続3回目の得点王を受賞



〔2016年〕 FIFAクラブワールドカップで鹿島アントラーズが準優勝

2017年	アスクラロ沼津がJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・14クラブ Jリーグ提携リーグの国籍を有する選手の登録数、エントリー数を日本人と同じ扱いに
1月	㈱ Jリーグデジタル設立 2017 Jリーグ アジアチャレンジinタイを開催
2月	J1リーグが3年ぶりに1ステージ制で開幕
3月	25回目のリーグカップ戦（JリーグYBCルヴァンカップ）が開幕
4月	㈱ Jリーグホールディングス設立。関連会社を再編 ㈱ Jリーグマーケティング設立 ㈱ Jリーグエンタープライズ、Jリーグフォト㈱、 ㈱ Jリーグデジタルエンタテインメント、 ㈱ J ADVANCEが解散
7月	明治安田生命 Jリーグワールドチャレンジを開催（浦和レッズ vs ボルシア・ドルトムント／鹿島アントラーズ vs セビージャFC）
11月	浦和レッズがAFCチャンピオンズリーグ優勝
12月	FIFAクラブワールドカップに浦和レッズが出場（5位）
2018年5月	Jリーグ開幕25周年 eスポーツに参入。明治安田生命 eJ.LEAGUE開催
6月	2018 FIFAワールドカップロシアに日本代表出場
11月	鹿島アントラーズがAFCチャンピオンズリーグ優勝
12月	鹿島アントラーズがFIFAクラブワールドカップ出場（4位） 川崎フロンターレより3年連続でJリーグ最優秀選手賞選出。同一クラブからの3年連続は史上初
2019年	ヴァンラーレ八戸がJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・15クラブ ホームグロウン制度導入 外国籍選手の選手登録数制限を廃止。試合エントリー数、試合出場数の上限をJ1は5人、J2・J3は4人に変更 ルヴァンカッププライムステージとJ1参入プレーオフでビデオアシスタントレフェリー（VAR）導入を決定
12月	1シーズンのJリーグ公式試合入場者数総数が11,104,480人*となり初めて1,100万人を突破。J1は平均入場者数が初めて2万人を突破し、過去最高の20,751人に
2020年	F C今治がJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・16クラブ 明治安田生命 J1リーグでVAR導入。（6月27日の再開以降は導入を見送り）
1月1日	株式会社 Jリーグホールディングスが吸収合併 継続会社とし、子会社である株式会社 Jリーグデジタル、株式会社 Jリーグメディアプロモーション、株式会社 Jリーグマーケティングの3社を吸収合併 消滅会社商号を「株式会社 Jリーグ」に変更
2月	新型コロナウイルス感染症拡大のため、2月26日以降の公式試合を延期し、6月27日に再開
3月	日本野球機構（NPB）と新型コロナウイルス対策連絡会議創設 2020シーズンの明治安田生命 Jリーグの結果に伴う2021シーズンのJ2、J3への降格を廃止 F C東京U-23チームがリーグ戦再開後、明治安田生命 J3リーグへの参加を辞退
8月、9月	三浦知良選手（横浜F C）が、53歳でリーグカップ戦（8月5日）、J1リーグ（9月23日、12月19日）の最年長出場記録を更新 Jユースカップ、Jリーグインターナショナルユースカップなど育成組織の大会開催を中止
2021年	テゲバジャーロ宮崎がJ3に新加入／J1・20クラブ、J2・22クラブ、J3・15クラブ 明治安田生命 J3リーグへのU-23チーム参加を廃止

* AFCチャンピオンズリーグ含まず
※クラブ名、大会名は当時のもの



〔2017年〕 25回目のリーグカップ戦（JリーグYBCルヴァンカップ）が開幕
〔2018年〕 Jリーグ開幕25周年



〔2017年〕 浦和レッズが2度目のACL制覇
〔2018年〕 鹿島アントラーズがACL初優勝



〔2018年〕 Jリーグがeスポーツに参入。明治安田生命 eJ.LEAGUEを開催



〔2019年〕 1シーズンのJリーグ公式試合入場者総数が初めて1,100万人を突破。
J1は初の平均2万人突破



〔2020年〕 新型コロナウイルス感染症拡大のため、2月26日開催試合より6月27日まで公式試合を延期。6月27日より無観客で再開

歴代優勝クラブ

	J 1リーグ ※1	1stステージ ※2	2ndステージ ※2	ルヴァンカップ ※3	J 2リーグ ※4	明治安田生命 J 3リーグ
1992	———	———	———	ヴェルディ川崎	———	———
1993	ヴェルディ川崎	鹿島アントラーズ	ヴェルディ川崎	ヴェルディ川崎	———	———
1994	ヴェルディ川崎	サンフレッチェ広島	ヴェルディ川崎	ヴェルディ川崎	———	———
1995	横浜マリノス	横浜マリノス	ヴェルディ川崎	———	———	———
1996	鹿島アントラーズ	———	———	清水エスパルス	———	———
1997	ジュビロ磐田	鹿島アントラーズ	ジュビロ磐田	鹿島アントラーズ	———	———
1998	鹿島アントラーズ	ジュビロ磐田	鹿島アントラーズ	ジュビロ磐田	———	———
1999	ジュビロ磐田	ジュビロ磐田	清水エスパルス	柏レイソル	川崎フロンターレ	———
2000	鹿島アントラーズ	横浜 F・マリノス	鹿島アントラーズ	鹿島アントラーズ	コンサドーレ札幌	———
2001	鹿島アントラーズ	ジュビロ磐田	鹿島アントラーズ	横浜 F・マリノス	京都パープルサンガ	———
2002	ジュビロ磐田	ジュビロ磐田	ジュビロ磐田	鹿島アントラーズ	大分トリニータ	———
2003	横浜 F・マリノス	横浜 F・マリノス	横浜 F・マリノス	浦和レッズ	アルビレックス新潟	———
2004	横浜 F・マリノス	横浜 F・マリノス	浦和レッズ	F C 東京	川崎フロンターレ	———
2005	ガンバ大阪	———	———	ジェフユナイテッド千葉	京都パープルサンガ	———
2006	浦和レッズ	———	———	ジェフユナイテッド千葉	横浜 F C	———
2007	鹿島アントラーズ	———	———	ガンバ大阪	コンサドーレ札幌	———
2008	鹿島アントラーズ	———	———	大分トリニータ	サンフレッチェ広島	———
2009	鹿島アントラーズ	———	———	F C 東京	ベガルタ仙台	———
2010	名古屋グランパス	———	———	ジュビロ磐田	柏レイソル	———
2011	柏レイソル	———	———	鹿島アントラーズ	F C 東京	———
2012	サンフレッチェ広島	———	———	鹿島アントラーズ	ヴァンフォーレ甲府	———
2013	サンフレッチェ広島	———	———	柏レイソル	ガンバ大阪	———
2014	ガンバ大阪	———	———	ガンバ大阪	湘南ベルマーレ	ツエーゲン金沢
2015	サンフレッチェ広島	浦和レッズ	サンフレッチェ広島	鹿島アントラーズ	大宮アルディージャ	レノファ山口 F C
2016	鹿島アントラーズ	鹿島アントラーズ	浦和レッズ	浦和レッズ	北海道コンサドーレ札幌	大分トリニータ
2017	川崎フロンターレ	———	———	セレッソ大阪	湘南ベルマーレ	ブラウブリッツ秋田
2018	川崎フロンターレ	———	———	湘南ベルマーレ	松本山雅 F C	F C 琉球
2019	横浜 F・マリノス	———	———	川崎フロンターレ	柏レイソル	ギラヴァンツ北九州
2020	川崎フロンターレ	———	———	F C 東京	徳島ヴォルティス	ブラウブリッツ秋田

※ 1：1998年までは1部制、2015年から明治安田生命 J 1リーグ
※ 2：1995年まではそれぞれサントリーシリーズ、NICOSシリーズ
※ 3：2016年6月21日よりヤマザキナビスコカップから改称
※ 4：2015年から明治安田生命 J 2リーグ



2020明治安田生命 J 1リーグ チャンピオン【川崎フロンターレ】



2020 J 2リーグ YBC ルヴァンカップ カップウィナー【F C 東京】



Jリーグパートナー

■ Jリーグタイトルパートナー
明治安田生命保険相互会社

■ Jリーグオフィシャルブロードキャスティングパートナー
DAZN Japan Investment 合同会社

■ Jリーグトップパートナー
株式会社アイデム
ルートインジャパン株式会社
イオンリテール株式会社
Electronic Arts Inc.
株式会社NTTドコモ
株式会社コナミデジタルエンタテインメント
いちご株式会社

■ Jリーグ百年構想パートナー
朝日新聞社

■ リーグカップパートナー
ヤマザキビスケット株式会社

■ スーパーカップパートナー
富士ゼロックス株式会社

■ Jリーグオフィシャルエクイップメントパートナー
アディダス ジャパン株式会社 / 株式会社モルテン

■ スポーツ振興パートナー
独立行政法人日本スポーツ振興センター

■ Jリーグオフィシャルチケットティングパートナー
びあ株式会社

■ JリーグオフィシャルECプラットフォームパートナー
楽天株式会社

■ Jリーグオフィシャルテクノロジーパートナー
NTTグループ

■ Jリーグサポーティングカンパニー
ヤフー株式会社
デロイト トーマツ ファイナンシャルアドバイザー 合同会社 /
デロイト トーマツ コンサルティング 合同会社
データスタジアム株式会社
株式会社IMAGICA GROUP / 株式会社イマジカ・ライブ

* 2021年2月1日現在